

仙台大学附属図書館の憂鬱

Melancholy of Sendai University Library

日下三男¹
Mitsuo KUSAKA

近年、「読書離れ」「活字離れ」という言葉をよく耳にする。生活環境の変化やさまざまなメディアの発達・普及などを背景として指摘される。新聞は購読部数が落ち込み、出版業界も書籍・雑誌の売れ行きは電子出版が好調ながらも紙媒体で右肩下がりの傾向が続く。こうした状況は見慣れた市中の風景をも変え、「街の本屋さん」が次々と消えてゆく。一方で、デジタル化した若者は「読まない」習慣が身につく、大学入学後も図書館を敬遠しがちになっている。憂鬱（ゆううつ）なる附属図書館の現状と先行きを考えた。

キーワード：本、書店、図書館、スマホ、インターネット

■ 街の本屋が姿を消す

仙台大学から北へ歩いておよそ15分、船岡小学校前を通る旧国道4号（白石柴田線）沿いで空き店舗に行き着く。昔、コンビニエンスストアだったような平屋建てだ。店先の駐車場に掲げられた看板には「みちのく書房」と書かれていて、丸ゴシックの「本」「BOOK」の赤い文字が色あせたとはいえ今なおはっきり読める。

この日は二十四節気の雨水（2月18日）。前の週末で日本列島に長く居座った寒波がようやく緩み、道路向かいの大河原警察署船岡交番はパトカーや人の出入りが盛んだし、時分どきのせいだろうか、周辺の商業施設で働く人たちが連れ立って食堂やコンビニへ向かっていた。誰一人、街中にぽっかり空いた、この欠落を気にする様子はない。もう当たり前の景色として受け止められている感じがした。

1年前、みちのく書房は店をたたんだ。80代のYさん夫婦と娘さんが開店の午前9時半から夜8時まで、本・雑誌の配達や店番をそれぞれ担いながら切り盛りしてきたが、ここが潮時と踏んだ。それよりおよそ半年前、3人が口をそろえるように「本や雑誌が読まれなくなっちゃって…。時代の流れなのかな」と言っていたのを思い出す。

仙台大学がある柴田町は人口3万6000強。県立柴田高校もあって近隣市町と比べて10代、20代の若者が多く住む。そんな自治体で「街の本屋さん」はなくなった。書店はわずかにショッピング

センターの大型店に入る全国チェーンの店だけとなった。

この出来事、果たして時代の流れで消えていくことを惜しむだけでいいのか。見慣れた風景が失われるとは一体何であろうかということに思いを巡らせたい。

現代人、とりわけ若者の文字離れが巷間（こうかん）いわれて久しい。インターネットが登場した1995年以降、その兆候は顕著で、もはや加速化している。

世は情報があふれ、なにも好き好んで新聞や雑誌を開いて知見を得なくてもいい社会になった。スマホやタブレット、パソコンからピンポイントで探し求めている情報を探せばいい。

仙台大学附属図書館（以下仙台大学図書館）にこんなデータ（表・グラフ）がある。入館者と本の貸し出し実績を年度ごとにまとめている。

◇仙台大学図書館入館者・本貸し出し実績

年度	2023	2022	2021	2020	2019
入館者数	24,979	13,275	10,262	9,732	49,342
貸出冊数	931	824	1,171	1,386	1,786

2018	2017	2016	2015	2014	2013
55,670	56,660	56,583	63,008	64,263	60,432
2,280	2,531	2,721	2,982	3,525	3,063

2012	2011	2010	2009	2008	2007
57,174	64,441	82,409	77,550	70,560	71,525
2,983	3,286	4,803	4,321	3,928	4,139

1 仙台大学体育学部スポーツ情報マスメディア学科 教授

2006	2005	2004
101,773	83,204	53,731
3,230	4,483	4,126



どうだろう、その推移をみれば、これから5年、10年先を予測するのが何やら怖くなってくるデータである。

■ 本を敬遠する姿が浮き彫り

2020年度から22年度までの3カ年は新型コロナウイルス禍に遭って数字の落ち込みは致し方ないといえよう。とはいえ、23年度と10年前の14年度を比較すると、減少ぶりは目を覆うばかりである。貸出冊数はおよそ7割減の931冊。22年度の824冊からやや持ち直したものの、1000冊を下回った数字は重く受け止めなければいけない。

加えて仙台大学図書館は20年以降、コロナ禍を受けて貸出冊数の制限を3冊から5冊に緩和しただけに、余計に深刻度が増す。

一方、データ分析として「本は借りないながらも入館して本を開いた」という見方があるかもしれない。しかし、23年度の入館者は10年前の6万432人から実に6割以上減り2万4979人。つまり「立ち寄らない」「読まない」がセットになっていることを数字は裏付けているし、本を敬遠する学生たちの姿が浮き彫りになる。

25年1月。もうすぐ期末の定期試験期間に入るというウイークデーの正午過ぎ、図書館内の1階から2階を巡ってみて、「本と対話する」学生が少ないことを目の当たりにした。というのも、見掛けた10人ほどのうち棚に納められた本の背表紙を目で追っていたのは2人で、ほかは机にバッグを置いて椅子に座りながらスマホをのぞき込んでいたからだ。

「いい」「悪い」と簡単に片付けるつもりはない。静かな環境下に身を置いていたいから図書館に来たという学生は、それはそれでいい。しかし、こうした光景を決して見過ごすわけにはいかない。館内の本棚にほこりが積もり積もってゆくだ

けの流れをただ黙って眺めているのは寂しい。

本はページが開かれてこそ価値があるし、あるいは読まれないにしても、棚から探し求められてこそ本望であろう。なぜ学生たちの多くは年を追うごとに遠ざかっていくのか。

仙台大学図書館の「知」は息が上がりようとしている。今、その呼吸に耳を澄ませてみたい。

■ 地域に育まれる学生たち

街の本屋が姿を消していつていることと、学生たちが本を読まなくなっていることは大いに関係している。人は地域に育まれて活動するわけだから、そこに本屋がなければ本を手にする機会は減る。

仮にショッピングセンターの大型店があつて、チェーン展開する大規模な書店が入っていたとしよう。10代の少年少女は自宅が大型店に気軽に行けるほどの距離でなかったとしたら、あえて本選びに行こうとはしないだろう。なぜなら興味と関心に応える情報を導き出してくれるスマホがあるから、用はそれで十分である。本や雑誌が棚に並ぶ中から情報を得るという行為は、費やす時間が随分かかると考えて、それに見合うほどの効果や満足度は低いと判断する。IT化やデジタル化が進んだ時代に生まれた世代を指す「Z世代」の学生にとって本選びは、いわゆるタイムパフォーマンスの価値観でいえば割に合わない。

彼らはますます本というリアルな媒体から離れていつている。

例え話をしよう。あなたがある港町を訪ねて岸壁で釣り糸を垂れる人に会う。「天気がいいですね、釣れますか」「いいや、きょうはサッパリだ。全然駄目、釣れないよ」。こんな会話を交わすと、釣りを経験したことがない人はたぶん「釣れないのに何が楽しくて何時間も釣り糸を垂れているのだろう」と思うかもしれない。

しかし、釣りの楽しさを知る人ならどうだろう。「それにしてもきょうは陽気がいい。そろそろアタリがあるといいですね」と言葉を掛けることもあり得る。言わないにしても、のんびり釣り糸を垂れる人の気持ちに自分を重ねられる。

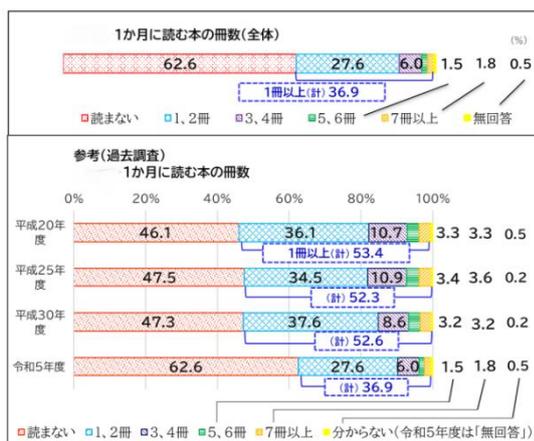
経験とは想像することのスイッチを握っている。

「みちのく書房」のように書店が姿を消すニュースは後を絶たない。出版科学研究所によると、日本の書店数の推移は表の通り。23年度の店舗総数は1万918。前年度から577店減り1日1店以上のペースで減り続けている。このペースが

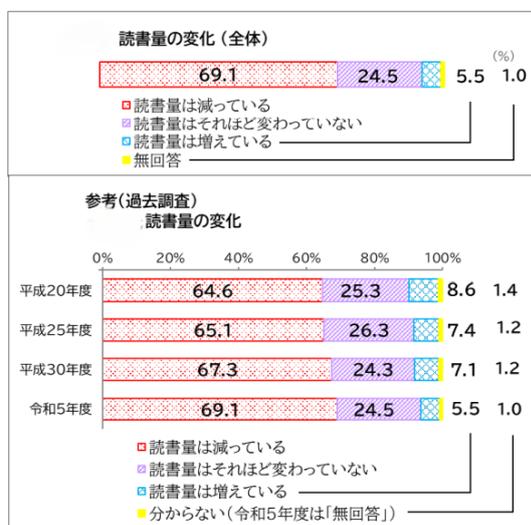
続くとこの先はどうなるのか。人口が1億を切ると推定されている50年代には7割減のおよそ3000店台まで落ち込む可能性がある。

本屋のある風景が失われつつあるなかで、歩調を合わせるように人は本から離れている。文化庁が全国の16歳以上の6000人を対象に実施した23年度の「国語に関する世論調査」(2グラフ、文化庁報告書より転載)によると、1カ月に1冊も本を読まない人が6割を超え、読書離れが急速に進んでいることが明らかになった。

この調査は5年ごとに実施し、「読まない人」の割合が過去いずれも4割台であったのに今回6割台にまで達していることを示した。大人はもはや半分以上が本に接しないのである。



気になるのは「あなたの読書量は以前に比べて減っていますか」という質問への回答結果(グラフ下)である。

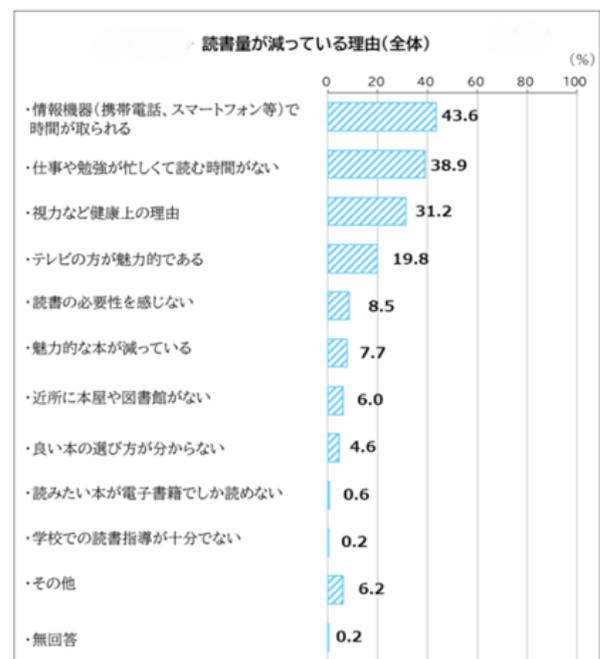


「減っている」が毎回多くなり、今回69.1%に

なった。逆に「読書量は増えている」は減少傾向で5.5%へ。ただ今回の調査方法が変わったため過去のデータと単純比較はできないものの、普段本に親しんでいる人さえも読む量が減り、同時に読書人口の広がりが見えない現状は浮き彫りになった。

■ デジタル全盛の時代

日本の大人はどうして読書量が減ってしまったのか。再び文化庁の「国語に関する世論調査」(23年度)から引く。回答は二つまででき、結果はグラフ(文化庁報告書より転載)の通り。「読書量は減っている」と答えた人(69.1%)にその理由を問うと、「情報機器(携帯電話、スマートフォン等)で時間がとられる」が43.6%で最も多く、次に「仕事や勉強が忙しくて読む時間がない」38.9%、「視力など健康上の理由」31.2%、「テレビの方が魅力的である」19.8%、「読書の必要性を感じない」8.5%などと続く。



これらの回答結果に通底するのは強まるデジタル化とインターネットの浸透である。モバイル性に優れたスマホを見れば、即座にインターネットに接続でき、情報は容易に取り出せる。しかもX、TikTok、インスタグラム、フェイスブックなどのSNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)は自分の関心領域に沿った話題投稿を集めてくれる。

何か調べものをしようとしたら、検索機能で目当ての文献資料にアクセスできる。「こんな便利

なものはない」と多くの方は喜び、スマホに依存する。好奇心を満たす欲求は基本オンデマンドで放送するテレビ番組をもやがて上回り、そのままスマホの画面に引き寄せられ続ける。

■ 情報があふれる社会

インターネットの発展と ICT（情報通信技術）普及の歩みはコミュニケーションの世界に変革をもたらす。かつて 15 世紀半ばに活版印刷術が発明されると、その実用化によって読書文化が形成されていったように人々の生活様式は変わる。あの時代、欧州の人々は布教活動に熱心だったキリスト教の聖書を手にしたことで、福音書に描かれた教義に賛同したのであろう。技術革新は時代を新たに作っていく熱源であるといえる。

翻って現代、インターネットに加えて生成 AI（人工知能）が日常生活や職場に入り込んでいる。

OpenAI（米国）は 22 年、ChatGPT を公開し、その自然な対話能力で世界を驚かせた。大量のテキストデータを学習することで、人と自然な会話ができるようになった。ほかの IT 企業、マイクロソフト、アルファベット（グーグル）、メタ、アマゾン（いずれも米国）なども続々と開発にしのぎを削る。特に中国のスタートアップ企業「DeepSeek（ディープシーク）」が 25 年 1 月に公開した生成 AI は ChatGPT をしのぐ性能といわれている。

生成 AI はいくつものデータを読み込んで機械学習し、パターンや関係性を活用しながらテキスト、画像、動画、音楽などの多様なコンテンツやアイデアを生み出す。従来の AI がプログラミングしたデータで決められた行いを自動化するのは異なる。使用者と対話しつつ最適な情報を提供してくれる。

コンピュータ科学を長年研究し 24 年ノーベル物理学賞を受けた「AI 界のゴッドファーザー」、ジェフリー・ヒントンは、生成 AI と現代の関係性についてこう言っている。「生成 AI が人類の知能を上回り、人間社会を支配する可能性がある」（読売新聞オンライン 23 年 12 月 4 日配信）。この指摘は技術の急速な進展に伴うリスクに警鐘を鳴らしている。

イスラエルの歴史家ユヴァル・ノア・ハラリも同様の見方をする。英誌エコノミストで生成 AI の問題を論じているのを読売新聞が紹介している。記事（23 年 6 月 18 日）によると、「民主主義は対話であり、対話は言語による。AI が言語を乗っ取れば、有意義な対話、すなわち民主主義は破壊さ

れかねない」核兵器は『文明を物理的に破壊できる』が、生成 AI は『私たちの精神世界と社会』を滅ぼす『新しい大量破壊兵器』になりうる」「印刷術やラジオは人々のアイデアを広げる助けになったが、新しいアイデアを生み出したわけではない。AI はその点が全く違う」と。

碩学の言説からは危機感がひしひしと伝わってくる。だからこそ生成 AI に支配されないために「目覚めよ」と呼び掛ける。

肝心なのは何よりも人としての自覚であろう。発展と成長を担保しつつ、人間らしい社会を形作ってゆくために何を守ってゆくのが問われている。

答えを導き出すのにヒントになりそうなのが「学びの共同体」理論で知られる教育学者佐藤学の指摘である。知識と情報をまず分けて考えることが前提で、知識は経験を伴いながら学ぶべきであり、これを分断してしまうとそれは単なる「情報」に過ぎなくなる。ここで示す経験とは人にとって文脈を表し記憶に刻まれる。一方、情報はこの文脈を奪っているという。

本の読み込みで得る「知識」と、スマホに知らぬ間に流れ込んでくる「情報」はやはり分けて考えたい。

■ 仙台大生、きっぱり「読まないっす」

米映画『ゴーストバスターズ』（アイバン・ライトマン監督、1984 年公開）の冒頭シーンが実に面白い。

物語はコロンビア大学の研究者たち男 3 人がニューヨークを舞台に幽霊と対決する内容が描かれる。心霊現象やゴースト（幽霊・霊体）の目撃例が増加し、男たちが最初に幽霊と遭遇するのがニューヨーク公共図書館である。

同図書館はニューヨーク有数の観光スポットであり、施設に 6000 万点のコレクションを誇る世界屈指の「知の殿堂」として知られる。ゴーストはここに現れ、探求する人々に襲い掛かろうとした。読書する者たちを抑え込めば、後の戦いは楽な展開に持ち込めると踏んだのだろうか。

本を読み、そして学ぶ者は幽霊が一目置く存在なのである。

今、本を読まなくなっているという傾向が強まっている。その様子はこれまで論じてきた通りである。実際はどうなのか、山形県出身の大学生 A さんにインタビューして心情を聞いてみた。

一問一答は次の通り。

一本はよく読む方だと思う？ この 1 カ月で読

んだ本があったら教えて。

いや読まない。読まないっす。でも、就活関係の参考書は手にする。公務員試験のカコモン（過去問題集）とか「傾向と対策」とか。本を開くといったら、そんな感じです。

—アパートの部屋の本棚には文芸書や随筆集、詩集、あるいは専門書なんかあるの？

ないです。もちろん学校の授業で使う教科書はあります。でも、それ以外はない。そもそも本は読まない。あ、論語の本はある。う～ん、それもめったに開かないな。高校時代はよく読んだんだけど。

「子曰く、剛毅木訥仁に近し」。在るべき人の姿を説いているのが好きです。意味ですか？ 意志が強く、気性がしっかりして、飾り気がなく、そして口数が少ない人は最高の徳である仁に近いってことです。今でも覚えています。すごいですね。

—雑誌は？

読まない。だから漫画本もない。そもそもテレビでアニメに親しむってことがなかったから興味がわからない。例えば飲食店に入っても雑誌を手にすることはない。

—じゃあ、過去に読んだ本で記憶に残っているのがあったら教えて。

『松坂世代の無名の捕手が、なぜ巨人軍で18年間も生き残れたのか』（加藤健著、竹書房、2017年）は面白かった。高校時代にやはり野球部だったし、野球ものだとすんなり（体に）入ってくる。

—本の内容でどんなところが良かったの？

プロ野球で10年やっただけでもすごいのに18年、18年ですよ。驚く。私利私欲を捨て、腐らずに投手のためチームのためやっていくことがとても大切なのだなと知った。仲間を大切にすると、我慢するってこともね。

—その本以外に何か覚えている本はある？

ない。そもそも本を買わないから。『松坂世代の』も高校時代に（一つ違いの）弟が休日に母親へ『本屋に行きたい』とねだって、ついでに俺も連れ出されてしまって、たまたま陳列棚にあの本があったから買っただけ。著者は野球選手だしもともと知っていたから買ったわけです。

—山形では本屋に行くことはあったの？

行かない。（実家がある）米沢は車で20分ほど走らないと、大型ショッピングセンターの敷地内にある（前述の本を購入した）本屋に行けない。街の本屋さんなんてないですよ。山形市内で下宿していた高校時代は近くに老舗の本屋があった

けど、そこも行かなかった。

—読書離れを心配する声がある。自分に置き換えてみて考えたことはある？

考えるってことが足りなくなってしまうってはいいい結果を生むはずはないと確かに思う。だからニュースには敏感でありたいし、気を付けてスマホでチェックしている。もちろん実家に帰ったら新聞にも目を通す。今、アパートでも新聞を読むとなるとカネがかさんでそれは無理。要は文字を読むってことに注意を払ってあげればいいのではないかな。

—最後の質問。読書離れがこのまま続いてゆくと、いつの日か図書館はなくなるのだろうか。

分からない。本は買わないけれども「読みたい本があったら図書館へ」という行動パターンはみんなが共有していると思うし、要するに本は共有財産という考え方がある限り図書館はなくなるのではないかな。なくなってほしくない施設です。

■ 論語の学びは体に染みつく

楽しいインタビューだった。というのも、本や活字を嫌っているのではなく、むしろ言葉の端々に親しみが込められていたからである。回答の文章で割愛したが、論語の本を語るときに「文章を長い時間かけて読むのはつらいから本は読まない。でも、論語は昔の誰がこう言って、こういう意味だとか説明している。これって読むのが疲れたらキリよくやめられる。これはこれで勉強になる」と笑顔になった。

あの表情こそが本と活字の「ちから」と確信した。大学生として過ごす現在でこそ、読書から離れているものの、やがて記憶の古層に埋もれた論語の学びがよみがえるかもしれない。

読書とは読破した冊数や作家、分野など何も関係ない。感動や学びは時を経てリフレインなのである。川端康成が小説『散りぬるを』に書かれていた言葉を思い出す。「忘れるにまかせるといことが、結局最も美しく思い出すということなんだな」（新潮文庫、1967年）

■ 情報は文脈を奪い、知識は文脈を伴う

情報をたくさん持っている者が賢いと早合点する風潮が先鋭化しつつある。インターネットのアルゴリズムによって、自分の好みに合わせた情報だけが表示される状態を意味するフィルターバブルや、その状況下つまり SNS 上で自分と同じ考えや価値観の人の意見が行き交うと、その情

報がすべて正しいかのように思い込んでしまうエコーチェンバー現象は現代人を危険にさらす。断片的な情報の寄せ集めがいつの間にか「教養」という言葉に置き換わっていることさえある。

「知ってるつもり」は危ない。教養は知識に培われてゆくものである。佐藤学が言ったように、情報は文脈を奪い、知識は文脈を伴いながら人格をも形成する、と重ねて強調したい。

知識となっていくはずの読書という文化が揺らいでいる。代わって、デジタルの衣を被った、得体のしれない空気のようなものが社会を覆う。

先行きをふと想像するとき、ドストエフスキーの『罪と罰』(工藤精一郎訳、新潮文庫42刷、1866年)で描かれたエピローグを思い起こさずにはいられない。主人公ラスコーリニコフは殺人を犯した罪でシベリアの牢獄にとらわれる。そこでかつて見た夢を思い出す。

■ ドストエフスキーの予言!!

＜彼は病気の間こんな夢を見たのである。全世界が、アジアの奥地からヨーロッパに向かっていくある恐ろしい、見たことも聞いたこともないような疫病(えきびょう)の犠牲になる運命になった。ごく少数のある選ばれた人々を除いては、全部死ななければならなかった。それは人体にとりつく微生物で、新しい旋毛虫のようなものだった。しかもこれらの微生物は知恵と意志を与えられた魔性だった。これにとりつかれた人々は、たちまち凶暴な狂人になった。しかも感染すると、かつて人々が一度も決して抱いたことのないほどの強烈な自信をもって、自分は聡明で、自分の信念は正しいと思いこむようになるのである。(中略)すべての人々が不安におののき、互いに相手が理解できず、一人一人が自分だけが真理を知っていると考えて、他の人々を見ては苦しみ、自分の胸を殴りつけ、手をもみしだきながら泣いた。＞

旋毛虫は当時ロシアに押し寄せた西欧合理主義の波という見方をする文芸評論家が多い。同時に2020年以降には新型コロナウイルスをダブらせて論考する人もいる。いずれにせよ本稿においては疫病をDX(デジタルトランスフォーメーション)推進の流れとみて旋毛虫をSNSや生成AIに置き換えて受け止める。

＜自分は聡明で、自分の信念は正しいと思いこむ

＞
＜互いに相手が理解できず、一人一人が自分だけが真理を知っていると考えて＞

なんとこれでは「独りよがり」の拡大再生産ではないか。

独善に陥らぬために人はもう一度本を手にしなければならない。米国の未来学者で脱工業社会の到来とデジタル化社会を予測したアルビン・トフラー(1928～2016年)は出世作『未来の衝撃』(徳山二郎訳、中公文庫、1970年)で、パソコンもない時代に「情報過多」という用語を世界に広め、これから技術と社会の変化が加速化し人々が孤立していくと見越した。加えてトフラーは後年、「学び直し」の必要性を説き、「21世紀の文盲とは、読み書きできない人を意味しない。学べず、学んだことも忘れられず、学び直すこともできない人だろう」と訴えた(日経電子版2016年6月30日配信)。

今、学びの主体がわが身であることを自覚しなければならない。スマホにあふれる情報をよりどころとして生きる先にあるのは文盲である。そうなるのはあまりにも悲しい。生きる喜びを謳歌(おうか)するのは幸せにつながるのだから、学ぶためにまず本を手にした。学生にとって身近な所にある図書館こそ「あなたの未来を豊かにしてくれる場所」と言い続けたい。

宮沢賢治の童話『銀河鉄道の夜』(新潮文庫『新編 銀河鉄道の夜』所収、1989年)にはこんな一節がある。貧しく孤独な少年ジョバンニは親友カムパネルラと銀河鉄道に乗って夜空の旅をするなかで語り合う。

■ しあわせは本の中に

＜「カムパネルラ、また僕たち二人きりになったねえ、どこまでもどこまでも一緒に行こう。僕はもうあのさそりのようにほんとうにみんなの幸い(さいわい)のためならば僕のからだなんか百べん灼(や)いてもかまわない。」

「うん。僕だってそうだ。」カムパネルラの眼にはきれいな涙がうかんでいました。

「けれどもほんとうのさいわいは一体何だろう。」ジョバンニが云いました。

「僕わからない。」カムパネルラがぼんやり云いました。

「僕たちしっかりやろうねえ。」ジョバンニが胸いっぱい新しい力が湧くように息をしながら云いました。

(中略)

「僕もうあんな大きな暗(やみ)の中だつてこわくない。きっとみんなのさいわいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一緒に進んで行こう。」>

ほんとうのさいわい。宮沢の作品に通底するテーマともいえる。利他や救済を目的とする自己犠牲はもちろん尊い。いろいろな虫を食べてきたサソリが今度はイタチに食べられることでイタチが生き延びられるはずなのにと考えてしまう…。他者の立場で考える高潔な精神を誰もが持てば、より良い社会は築けるだろうが、人は生来わがままである。他人に迷惑を掛けぬ範囲なら自己本位で幸福を追い求める権利はある。

さて、どうやっていったらいいのだろう。答えは「僕わからない」のである。真理はいつも見つけにくい。そこで「しあわせ」を探す旅先が読書であってほしい。悩みを意味する大きな暗闇に包まれても新しい力は湧く。

■ 図書館の分散化 ～結びにかえて～

仙台大学附属図書館が学生に親しまれるようになるためにはどんな手立てを講じたらいいのだろう。

これまでは毎年在学生に呼び掛け、仙台市内の書店に行って選書してもらおうと同時に、選んだ本のポップ手書きを頼んで掲示している。学生に開かれた施設であることを目に見える形にして、少しでも図書館の堅苦しいイメージを払拭しようとの試みである。さらにデジタル領域にも目を向け、卒業研究の論文執筆のために必要な文献資料を探す人を支援する目的から、仙台大学図書館公式ホームページ内からアクセスできる関係ウェブサイトの紹介や検索方法を伝授する研修会を年1回開催している。

にもかかわらず、入館者や貸し出しが上向きに転じないのはさらなる有効な施策が必要なのである。多額の支出が伴う策などもってのほかであり、カネをかけずに取り組めるのは何だろうか。

提案したいのは図書の分散化である。狙いは活字離れを防ぐことにあるのだから、本や雑誌を手に取りやすい環境整備をするのがいい。例えば学内各棟の特定教室の一角に図書コーナーを設ける。決して大がかりでなくていい。棚一つの小ぢんまりした感じで十分である。スペースに本と雑誌を置く。新聞もあっていい。図書館が購読しているのは限りがあるから、1カ月前の発行でいい

から棚に置く。気になる学生が1人でもいて手に取ってもらったらうれしい。

コンセプトは活字に親しむ風景づくり。昼休み、静まり返った教室で日に当たりながら本を読む。ワイワイガヤガヤした学食でも結構だろう。腹がいっぱいになったところでスポーツ関係の雑誌をパラパラめくってみる。後年、そんな記憶が卒業生たちの脳裏に刻まれれば図書館にとっては本望である。

図書館は、大学であろうが地域の施設であろうが、その在り方を考えるとき、いったい何を道しるべにしたらいいのだろう。きっと答えのヒントは国立国会図書館法(1948年公布)の前文にありそうに思う。そこにはこう記されている。

<国立国会図書館は、真理がわれらを自由にするという確信に立つて、憲法の誓約する日本の民主化と世界平和とに寄与することを使命として、ここに設立される。> (原文のまま)

真理。なるほど、自由への扉なのだ。